

## Personal space 研究の背景

渋谷昌三

Psychological Abstractのsubject indexにPersonal Spaceの項目が入ったのは1973年からである。1976年、1977年には100編を越える論文が同誌に掲載されたが、その後は年平均50編前後となっている。現在のところ、我が国のPersonal Spaceに関する論文数は欧米にくらべてきわめて少ない。

Personal Spaceは非言語コミュニケーションの一つとして分類されている。そこで本論文では、Personal Spaceを含めた非言語コミュニケーション研究と社会的背景との因果関係を検討することにした。その視点は次の通りである。第1に、国際交流が盛んになり、異文化間コミュニケーションの必要性が高まった。第二に、社会環境の多様化にともなう、人と環境との問題が出てきた。第三に、対人関係の変化がコミュニケーションの重要性を強調することになった。

キーワード：パーソナル・スペース／非言語コミュニケーション

### 1. はじめに

Psychological Abstract では、1973 年より SUBJECT INDEX に Personal Spaceの項目が入れられるようになった。Psychological Abstractに掲載されたパーソナル・スペース研究の論文数は、1976年、1977年には100編を越えている。しかし、これらの年度をピークにして、最近では年間平均50編前後となっている。これらの研究の大半はアメリカで行なわれている。

本稿では、Hall, E. T. (1966)<sup>1)</sup>やSommer, R. (1969)<sup>2)</sup>の代表的な著書が発刊されて以来多くの論文が発表されるようになった社会的な背景を検討することにする。

パーソナル・スペースは非言語コミュニケーション(nonverbal communication)の一つである。Knapp, M. L. (1972)<sup>3)</sup>は非言語コミュニケーションを次のように分類している。

①プロクセミックス(proxemics:近接学)に関する要因として、社会的または個人的空間(パーソナル・スペース)の利用、および、これらの認知の仕方などがある。

②身体の動きおよび動作的表現行動に関する要因として、ジェスチャー、身体や手足の動き、顔の表情、目の動き(まばたき、視線の方向、瞳孔の拡大縮小)、姿勢などがある。

③身体的な特徴に関する要因として、体格、身体的な魅力、体臭や口臭、身長、体重、頭髮、皮膚の色などがある。

④接触行動に関する要因として、なでること、叩くこと、挨拶の仕方、抱くことなどがある。

⑤擬似言語に関する要因として、音声の質、会話のよどみ、笑い、あくび、ブツブツというような音声などがある。

⑥人工品に関する要因として、香水、衣類、口紅、眼鏡、かつら、その他の美容品などがある。

⑦環境要因に関するものとして、建築様式、室内装飾、照明、におい、色、温度、騒音、音楽などがある。

以上のように、パーソナル・スペースは非言語コミュニケーションの中ではプロクセミックスに関する要因として分類されている。そこで、本稿では、パーソナル・スペースを含めた非言語コミュニケーション研究が盛んになった背景を検討することにした。

こうした考え方に基づき、非言語コミュニケーション研究が要請されるようになった背景を、(1) 異文化

間コミュニケーションの必要性、(2) 社会環境の多様化：環境心理学への関心、(3) 臨床場面を含めた対人関係の新たな視点、に分類し考察することにする。

## 2. 異文化間コミュニケーションの必要性

Samovar, L. A. たち(1981)<sup>4)</sup>は、この20年来アメリカ人は異文化の問題に目を向けざるを得なくなったと考えているが、その理由は『60年代後半そして70年代前半の一時代は、比喩的な意味で、「世界が縮み始めた」とか、「地球時代が始まった」時代であると特徴づけられる』からであると述べている。

交通手段(主として飛行機)の飛躍的な進歩により、短時間のうちに世界のどんなところにも行くことができるようになった。かつては互いに遠く隔たり、孤立していた文化にいつも簡単に触れることができる。1977年にアメリカを訪れた外国人は1860万人であり、1978年には2000万人を越えている。このことは同時に、多くのアメリカ人が同じように外国に出かけていることを示している。

我が国でも、近年では、隣りの家にも行くような気楽さで外国旅行する人が急増している。まさに「地球は縮んでしまった」のである。

誰でもが気楽に異文化に触れることができるようになると、自国とは異なったコミュニケーションの様式に関心がそそがれるようになる。単なる興味だけでなく、外交やさまざまな交渉の際に異文化間コミュニケーションを理解する必要があるが出てくる。

パーソナル・スペースの研究論文が最も多かった1976年と1977年は、アメリカを訪れた外国人が急増した時期でもある。これは偶然の一致かもしれないが、アメリカ人が異文化間コミュニケーションに関心を持ち始めたことと無関係ではないと思われる。

こうした時期に、多数の第三世界の国々が誕生し、イランを代表とする国々で西欧世界の理解を越えた革命政権が樹立した。国際会議には、以前に増して、文化や宗教の異なった国々の代表が参加するようになり、地球規模での外交政策が要請されるようになった。必然的に、新たな異文化に対する理解が必要となった。

また、これまでアメリカは国際ビジネス社会での不動のリーダーであったが、諸外国の競争力が強くなったために、リーダーシップが弱まってきたばかりでな

く、アメリカ国内の市場へすら大きな影響を与えるようになった。

「1974年以来、アメリカの資本に対する外国の投資額は年平均13%増加した。そして、1978年にはアメリカの海外投資額の三分の二に匹敵するまでになった。しかも、110万人近い人々が国内にある外国資本の会社で働いており、その数は日々増加している」(“Time” Magazine, May, 29, 1978, p.68)という。ビジネスや就労の面からも異文化間コミュニケーションの理解が必要となったのである。日本でも類似の現象が起っていると考えられる。

オイルショックに代表されるように、地球上の天然資源の限界、食料の不足などの深刻な問題についての認識は、地球に住む人達共通の関心事となっている。さらに、核兵器が何時使用されてもおかしくないような時代であるので、核による悲劇を回避するためにも核兵器保有国相互の密接なコミュニケーションが必要となってきている。こうした困難な問題を解決するためには世界中の人達の相互理解が必要であるというコンセンサスが、異文化間コミュニケーションへの関心を高めている。

以上のことからわかるように、世界の情勢は地球規模で判断しなくてはならない「地球の時代」に突入しているのである。さまざまな人種や宗教、文化を越えた相互理解は、異文化間コミュニケーションの理解から始まるといえる。

ややミクロな視点に目を転じると、上述の時代はアメリカ国内における文化的な変革の時代でもあった。従来のアメリカ社会を支配してきた多数派集団に対して、黒人、チカノ(メキシコ系)、女性、老人、ホモ、貧民、ヒッピーなどの小集団の発言権が大きくなってきた。こうした小集団の存在を受容する人々が増加するにつれ、さまざまな機会に異文化間接触が起こるようになった。

生活様式や価値観の多様性は、時として一般人の了解をはるかに越えることがあるが、同じ社会に生活する隣人として、こうした少数派の人々を無視し続けることはできない。そこで異文化間コミュニケーションへの関心が高まってくることになる。

異文化間コミュニケーションには、言語によるものと非言語的なものとが含まれる。この2つのうち、Hall, E. T. (1966)<sup>1)</sup>の cross-culturalな研究で明らかにさ

れたように、異文化の人どうしのコミュニケーションでは「かくれた次元」でのプロクセミックスがきわめて重要であることがわかっている。しかしそれにもかかわらず、言語による相互理解の重要性は理解されやすいが、非言語的なことばの重要性は理解されにくい。それは、非言語的なことばは当人もはっきり意識しないままに交わされているからである。

以上のような異文化間コミュニケーションの要請に呼応して、たとえば、動物と人の非言語コミュニケーションを扱った著書(Hinde, R. A., 1972)<sup>5)</sup>、人の非言語コミュニケーションを体系的にまとめた著書(Harper, R. G. et al., 1978<sup>6)</sup>; Weitz, S., 1979<sup>7)</sup>)などが出版されている。

なお、より日常的な視点から書かれたものに、サモバー他著<sup>4)</sup>(西田司他訳)『異文化間コミュニケーション入門』(聖文社)がある。

日本における非言語コミュニケーション研究はアメリカのように盛んではない。しかし、『以心伝心』という思想があったり、言葉で自分を表現することが下手であることからすると、日本人は精密な非言語コミュニケーションを正確に使っていると思われる。にもかかわらず非言語コミュニケーションの研究が盛んでない理由として、日本人は異文化間コミュニケーションによる深刻な誤解の経験が少ないということをあげることができる。

しかし、海外に出かけ、異文化に触れた経験のある人が多くなるにつれて、日本人どうしの慣れ合いのコミュニケーションの限界がクローズアップされてくるに違いない。さらに、世代間のギャップや価値観の多様化が深刻な社会問題を引き起こすことが多くなるにつれて、非言語コミュニケーションへの関心が高まってくるものと思われる。

### 3. 社会環境の多様化：環境心理学への関心

環境の問題は心理学の大きな課題の一つである。環境の懸念は、Koffka, K. (1935)<sup>8)</sup>の著書『Principles of Gestalt Psychology』の中で初めて明確化されたようである。彼は環境を geographical environment (地理的環境)とbehavioral environment (行動的環境)に区別している。また、Uexküll, J. J. vonたち(1970)<sup>9)</sup>は比較生物学の立場から、「現実の世界」

と「認識された世界」に区別している。

こうした区別は、現在の社会環境の考え方に影響を及ぼしている。たとえば、人口の過剰が社会生活にどのように影響しているかを研究する際には、密度(density:一定の空間の中にいる人数比であり、客観的な指標となる)と込みあい(crowding:一定の空間の中にいる人々のその環境に対する評価であり、主観的な指標となる)に区別されることがある(Stokols, D., 1972)<sup>10)</sup>。すなわち、密度は事実としての環境であり、込みあいは認識された心理的環境であるといえる。

Ittelson, W. H.たち(1974)<sup>11)</sup>は環境が心理学の中でどのように扱われてきたのかについて次のような分類を行なっている。第1は、精神分析、行動主義およびゲシュタルト理論である。Freud, S.の精神分析、Skinner, B.F.のオペラント行動などの行動心理学、Koffka, K.のゲシュタルト学派の環境論などにおいて環境の問題が考察されている。第2は、Lewin, K.の場理論であり、life spaceの概念が紹介されている。第3は、Barker, R.の生態学的心理学であり、行動セッティング理論が紹介されている。第4は、微視的理論からのアプローチである。Gibson, J. J.は知覚との関係から、その他、パーソナリティの発達、学習の能力、社会的な能力と環境との関係などが扱われている。

以上のような環境論を基にして、1960年代の後半から1970年代にかけて、環境心理学 (environmental psychology) が出現してきた。従来の環境論では、精神発達や教育に及ぼす環境の影響、知覚や認知に及ぼす環境の影響などが扱われてきた。しかし、1970年代になると、都市部を中心として社会環境に対する関心が高まってきた。

Moos, R. H. (1976)<sup>12)</sup>は人間の社会生活における環境への関心の高まりを次のように述べている。『人間環境への関心は今日目立って強まっている。全体的、生態学的視点から人間とその環境を扱った著書の数、ここ数年間の方がそれ以前の30年間より多い。広くこの関心が高まったのは科学技術の発展にともなう副作用によって、「宇宙船地球号」上の微妙な生態学的な均衡に危機的な問題が生じたからである。最も重要な問題は、環境破壊、水や空気の汚染、人口密度の増大、資源の欠乏などである。』

こうした関心に基づき、建築学者は居住環境のよい

建築物の設計や都市の再開発計画に着手し始めたし、また、心理学者や社会学者は社会や個人の能力が最大限に発揮できるような最適環境の問題を検討するようになった。さらに、精神医学者やソーシャル・ワーカーは人々が適応しやすい社会環境とは何かといった問題を扱うようになった。パーソナル・スペースはこれらの問題のいずれにも関与する代表的な概念である。Proshansky, H. M. たち(1970)<sup>13)</sup>の著書である『Environmental Psychology - Man and his physical setting-』には、上述した関心事に関する代表的な論文が集約されている。

パーソナル・スペース研究の論文数が多かった1976年、1977年は、Moos, R. H. (1976)<sup>14)</sup>が社会的環境に対する関心が高まったとしている年代でもある。パーソナル・スペースは環境心理学の中では、crowding、なわばり、物理的環境(建築およびインテリア、机や椅子の配置など)、社会生活における相互作用、小集団などと関連して取り上げられている。

なお、環境心理学の代表的な著書として次のようなものを上げることができる。

①Proshansky, H. M. たち 1970『Environmental Psychology - Man and his physical setting-』(『環境心理学』1～6巻 権山貞登他訳, 1975, 誠信書房)

②Ittelson, W. H. たち 1974『An introduction to environmental psychology』(『環境心理学の基礎』、『環境心理学の応用』望月衛・宇津木保共訳, 1977, 彰国社)

③Mercer, C. 1975『Living in cities: Psychology and the urban environment』(『環境心理学序説』永田良昭訳, 1979, 新曜社)

④Moos, R. H. 1976『The human context: Environmental determinants of behavior』(『環境の人間性—行動科学的アプローチ』望月衛訳, 1979, 彰国社)

以上は邦訳されている環境心理学に関する一部の著書であるが、いずれも1976年、1977年以前に出版されており、環境心理学に対する関心の高まりをうかがい知ることができる。また、原著が出版されてから、3～5年のうちに次ぎ次ぎに翻訳が出版されていることからしても環境心理学に関心を持っていた日本の研究者の多いことがわかる。こうした環境心理学への関心

の高まりの中で多くのパーソナル・スペース研究が行なわれるようになったものと思われる。

パーソナル・スペースに関連した我が国の一般書には次のようなものがある。

①望月衛 1976 「個人空間のなかで—飲食住の心理」ブレーン出版

②権山貞登 1980 「空間が人をつくる 人が空間をつくる」講談社

③本間道子 1981 過密への挑戦—ブロックセックスとはなにか」講談社

④渋谷昌三 1986 「近接心理学のすすめ」講談社  
環境心理学に関する代表的な邦書として次のものがある。これらの著書ではパーソナル・スペースがその一部に紹介されているものもあるが、全く紹介されていないものもある。

①『環境心理学』 1976 相馬一郎・佐古順彦 福村出版

②『環境心理とは何か』 1977 D. カンター・乾正編著訳 彰国社

③『環境心理学』 1979 望月衛・大山正編著 朝倉書店(「社会環境」の項: 渋谷が分担執筆)

④『都市環境と住いの心理学』 1979 吉田正昭編著 彰国社

なお最近、建築学の著書の中に心理学の知見が積極的に取り入れられてきているように思われる。その多くが翻訳書であるが、たとえば、Canter, D. 1974『Psychology for Architects』(『建築心理学講義』宮田紀元・内田茂訳 彰国社 1979年)がある。この著書は入門書であるが、「空間の使い方」の章で、パーソナル・スペースやなわばり行動が取り上げられている。

#### 4. 臨床場面を中心とした対人関係の新たな視点

分裂病者の空間行動の異常を通してパーソナル・スペース研究が盛んに行なわれてきた。Sommer, R. (1959)<sup>14)</sup>やHorowitz, M. J. たち(1964)<sup>15)</sup>は臨床経験によってパーソナル・スペースの存在を認識したのである。ところが、実際の臨床場面では非言語コミュニケーション研究の成果があまり応用されていないようである。

菅野純(1982)<sup>16)</sup>はカウンセリングにおける非言語行

動に関して次のように述べている。

『これまでのカウンセリング研究においては、来談者と治療者との間に交わされた言語の分析を中心とした研究は数多くなされてきたが、非言語的な行動を分析して体系化し、それに治療的枠組みを与える試みは意外にも少なかった。非言語行動はことばの代理的手段あるいは補填的手段とみなされることが多(かった)……。カウンセリングの入門書の中にも、非言語行動や非言語コミュニケーション、ボディ・ランゲージといった項をもうけている書はきわめて少ないようである。』

こうした現状を考慮した上で、菅野純(1982)<sup>16)</sup>はGazda, G. M.たち(1977)<sup>17)</sup>の非言語行動のリストを参考にしてカウンセリング場面での非言語行動の分析を試みている。このリストは5つのカテゴリーから構成されているが、このうちの1つはパーソナル・スペースに関する項目になっている。

また、Perls, F. S.の創始したゲシュタルト療法の治療論の基盤には、『…治療者は「いま、この瞬間」の経験に直面させるべく、言語的のみならず運動的・非言語的コミュニケーションにも注目していく。』(平木典子, 1981)<sup>18)</sup>という考え方があ。非言語コミュニケーションと言語との間の矛盾や非言語コミュニケーション間の矛盾などが治療の手がかりとして利用されている。こうした発想は、非言語コミュニケーションで自分の本心を偽るのは困難であるという一般的な研究結果に支えられている。

rapportが成立しているときには、話し手と聞き手の姿勢や動きはしばしばsynchronizeしているようである。Kendon, A. (1970)<sup>19)</sup>が試みたフィルム分析によれば、うちとけて話をしている2人のリズムカルな動きは48分の1秒以内で一致していた。Schefflen, A. E. (1972)<sup>20)</sup>は、臨床場面で患者をリラックスさせるために、面接者は患者の動きに合せたsynchronizeを心がけるべきであると述べている。

Morris, D. (1977)<sup>21)</sup>は、親しい者どうしは無意識に同じ姿勢をとりやすい(synchronizeが起こる)という現象を姿勢反響と呼んでいる。

非言語コミュニケーションは患者の看護とも密接な関係がある。Blondis, M. N.たち(1977)<sup>22)</sup>は、看護の役割には技術の習熟の外に、患者の情動的ニーズに応えることのできる感受性を育てる必要があると述べ

ている。すなわち、技術の修得とともにコミュニケーション(主として非言語コミュニケーション)の技術を学ばなくてはならないことを強調している。非言語コミュニケーションによる接触の多い看護婦は患者とのコミュニケーションが盛んである(Agulera, D. C., 1967)<sup>23)</sup>こととか、重症心身障害児の療育では患児との間のパーソナル・スペースが重要な意味を持つ(橘英弥・杉野欽吾, 1973)<sup>24)</sup>ことなどが知られている。

上述した内容に関連したものとして次のような著書がある。

①Blondis, M. N. & Jackson, B. E. 1977『Non-verbal communication with patients : Back to the human touch』(仁木久恵・岩本幸弓訳1979『患者との非言語コミュニケーションー人間的ふれあいを求めてー』医学書院)

②木戸幸聖 1976 面接入門ーコミュニケーションの精神医学 創元社

③木戸幸聖 1983 臨床におけるコミュニケーションーよりよき治療関係のために 創元社

④サイコロジ 1982 特集=表情・身ぶり・しぐさーノンバーバルコミュニケーション サイエンス社

本稿で取り上げた文献はごく一部のものであるが、1970年代の初めから半ばにかけて臨床場面における非言語コミュニケーションの重要性が注目されてきたようである。これは、多くのパーソナル・スペース研究が行なわれるようになった時期でもある。臨床場面での非言語コミュニケーションはこれまで各人の経験によって培われてきた面が強い。科学的な分析に基づく研究結果を現場でもっと利用すべきであろう。

現代は言葉への不信が進行しつつあり、会話においても言語の重みがなくなりつつあるように見うけられる。マンガ世代の人々は、略画や意味不明の擬音によってコミュニケーションすることができる。こうした時代であるからこそ、非言語的なコミュニケーションに関する関心が高まってくるのだとも考えられる。

## 5. まとめ

パーソナル・スペース研究の動向を非言語コミュニケーションの問題として3つの観点から吟味した。このような研究が盛んに行なわれるようになったのは、それ相応の社会的背景のあることが分かった。

現今では、非言語コミュニケーション研究の成果がビジネス場面でも利用されるようになってきた。今後、人間関係を円滑にするノウハウとしても、非言語コミュニケーションを研究する必要性が高まるのではないかとと思われる。

## 文 献

- 1) Hall, E. T. 1966 The hidden dimension. New York: Doubleday. 日高敏隆・佐藤信行(訳)1970 かくれた次元 みすず書房
- 2) Sommer, R. 1969 Personal space: The behavioral basis of design. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall. 穂山貞登(訳) 1972 人間の空間: デザインの行動的研究 鹿島出版会
- 3) Knapp, M. L. 1972 Nonverbal communication in human interaction. Holt, Rinehart & Winston. 牧野成一・牧野泰子(訳) 1979 人間関係における非言語情報伝達 東海大学出版会
- 4) Samovar, L. A., Porter, R. E. & Jain, N. C. 1981 Understanding intercultural communication. Wadsworth, Inc. 西田司(訳) 1983 異文化間コミュニケーション入門 聖文社
- 5) Hinde, R. A. 1972 Non-verbal communication. Cambridge University Press
- 6) Harper, R., Wiens, A. N. & Matarazzo, J. D. 1978 Nonverbal communication: The state of the art. Wiley-Interscience Publication John Wiley & Sons
- 7) Weitz, S. 1979 Nonverbal communication. Oxford University Press.
- 8) Koffka, K. 1935 Principles of gestalt psychology. Routledge & Kegan Paul Ltd.
- 9) Uexküll, J. J. von & Kriszat, G. 1970 Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen Bedeutungslehre. S. Fischer Verlag. 日高敏隆・野田保之(訳) 1973 生物から見た世界 思索社
- 10) Stokols, D. 1972 On the distinction between density and crowding. Psychological Review, 79, 275-277.
- 11) Ittelson, W. H., Proshansky, H. M., Rivlin, L. G. & Winkel, G. H. 1974 An introduction to environment psychology. Holt, Rinehart and Winston. 望月衛(訳) 1977 環境心理の基礎 彰国社
- 12) Moos, R. H. 1976 The human context: Environmental determinants of behavior. John Wiley & Sons, Inc. 望月衛(訳) 1979 環境の人間性: 行動科学的アプローチ 朝倉書房
- 13) Proshansky, H. M., Ittelson, W. H. & Rivlin, L. G. 1970 Environmental Psychology: Man and his physical setting. New York: Holt, Rinehart & Winston. 穂山貞登(訳編) 1974 環境心理学 1: 概念と研究態度 誠信書房
- 14) Sommer, R. 1959 Studies in personal space. Sociometry, 22, 247-260.
- 15) Horowitz M. J., Duff, D.F. & Stratton, L. O. 1964 Body-buffer zone: Exploration of personal space. Archives of General Psychiatry, 11 651-656.
- 16) 菅野純 1982 カウンセリングにおけるノンバーバル行動. サイコロジー, 31, 3641. サイエンス社
- 17) Gazda, G. M. et al. 1977 Human relations development. 2nd ed. Allyn & Bacon. (菅野, 1982)
- 18) 平木典子 1981 ゲシュタルト療法 新版心理学事典, 195196. 平凡社
- 19) Kendon, A. 1970 Movement coordination in social interaction. Acta Psychologica, 32, 100-125.
- 20) Schefflen, A. E. 1972 Body language and the social order. PrenticeHall, Englewood Cliffs, N. J.
- 21) Morris, D. 1977 Manwatching: A field guide to human behaviour. Elsevier International Projects Ltd. 藤田統(訳) 1980 マンウォッチング: 人間の行動学 小学館
- 22) Blondis, M. N. & Jackson, B. E. 1977 Nonverbal communication with patients: Back to the human touch. John Wiley & Sons. 仁木久恵・岩本幸弓(訳) 1979 患者との非言語的コミュニケーション 医学書院
- 23) Agulera, D. C. 1967 Relationships between physical contact and verbal interaction between nurses and patients. Journal of Psychiatric Nurs-

- ing, 5, 5-21. (Knapp, M. L., 1972)
- 24) 橘英弥・杉野欽吾 1973 重症心身障害児教育におけ

る空間の問題—療育における最適距離を中心に—  
児童精神医学とその近接領域. 14, 84-95.

### Abstract

## Background for the Research of Personal Space

Shozo SHIBUYA

Personal space has been entered as a subject index in Psychological Abstract since 1973. More than 100 papers were published in this journal in 1976 and 1977. Thereafter the yearly publication has been reduced to approximately 50 papers on the average. The number of papers dealing with personal space in Japan at present is extremely less than those published in Europe and America.

Personal space is defined categorically as one of nonverbal communications. This paper discusses the interrelation between the research of nonverbal communications including personal space and the social background, on the basis of the following viewpoints. (1) Promotion of interchange has augmented the necessity of ethnocultural communication. (2) Diversification of social environments has given rise to the problem of man and environments. (3) Alteration of the personal relations has accentuated the importance of communication.

---

Department of Psychology